

沿 革

本町の歴史は古く、紀元前からすでに丘陵地を中心に集落が形成され、その跡に貝塚が残っていて多くの石器や土器が出土しています。

特に奈良時代前期には、龍角寺を中心として豪族が勢力を示し、豪族を埋葬したものと推定される岩屋古墳（国指定史跡）をはじめ、113基の古墳群が龍角寺から酒直に点在して、その歴史的面影を今日に伝えていきます。

江戸時代には、江戸と水郷の穀倉地帯との物資の流通が河川に依存していたことから、中継基地として大変な賑わいを示したといわれています。

明治22年に安食村、北辺田村、龍角寺村、酒直村、矢口村、須賀村、麻生村の7村が合併して境村となり、同25年には安食町に改称しました。その後昭和29年に豊住村（現在成田市）の一部を編入し、昭和30年12月1日に安食町と布鎌村が合併し、更に昭和31年1月1日に茨城県から出津地区が編入され現在の栄町が形成されました。

昭和47年の「水と緑の田園観光都市」構想の策定により、栄町の新たな施策の展開と成田線の電化に伴い、東京への通勤圏となりました。

昭和57年以降は、民間大規模住宅地開発の進展が大きな要因となり、住宅都市へと大きく変貌し、当時約9,000人だった人口も一時は約26,000人を有しましたが、現在では大規模な住宅開発も概ね完了し、若者層の都心回帰志向や少子化の進行などにより人口も微減の傾向にあります。